

入試分析 国語

【総評】都立の国語は易しめだが、ほんの少し難化。

国語で高得点を確保することが、合格を勝ち取るための第一歩！

1・2が漢字の読み取り・書き取り、3が物語文、4が論説文、5が評論文という構成は今まで通り。例年、受験者平均点は70~80点台と高めだが、今年は漢字の読み取りに少し難しめの問題があった。それでも落ち着いて解けば90点台に到達することも可能だ。

【問題分析】

1・2 漢字の読み取り・書き取り(1問2点×10問=20点)

1の読み取りは「均衡」「遵守」「謹(んで)」が例年より難しめ。2の書き取りは「カンラン」「センリヤク」といった出題だが、すべて小学校で習った漢字。普段から漢字を積極的に使うことで全問正解につなげよう。

3 物語文(1問5点×5問=25点)

すべて選択形式の出題。問1から問5まで、すべてが傍線部の前後に描かれた内容で判断できる素直な問題。中高生が主人公の小説からの出題が多かった都立共通問題の国語だが、今回は小学生の頃の父親との思い出を振り返る青年の物語。忙しかった父との久しぶりの休暇を、父に急かされながら絵を描いた思い出、子を思う親と親を思う子の気持ちというテーマには、共感を覚えやすかったのではないかな。

4 論説文(1問5点×4問+200字作文10点満点=30点)

問1から問4までが選択形式の問題。「対話」をテーマに、「言葉は思考そのもの」「言葉が現実を形作る」「言葉は相手に発することで成り立つ」ということを説明した上で、「対話とは同じ言葉について論じ尽くしてお互いにできる限り理解する」「合意や理解はあくまで理想の焦点」としつつ、「対話は自分が知っているという思い込みを破壊し、思いがけない考え方を生み出す」として、対話を続けることの必要性を主張している。問5の作文は「対話による創造」というテーマ。誰かと話し合っただけで自分の考えを変えたという経験から、対話が新たな考え方を生み出すことを述べ、積極的に対話を続けたいと主張できれば完璧だ。

5 古文を伴う評論文(1問5点×5問=25点)

すべて選択形式の出題。言語事項の問題は助詞の「と」の識別と歴史的仮名遣いの選択の2問。「雅楽と能」という、中学生にはあまり馴染みのないテーマ。ただ、都立高校の出題は古典の知識を問う問題ではない。引用される古文にも現代語訳が付いており、古語の意味を問う問題は現代語訳から探せばよい。あまり馴染みのない内容に惑わされず、過去問や模試で何度も練習して、独特の出題に慣れておこう。

入試に向けての学習アドバイス

文法や言語事項以外、残念ながら中学校の授業はあまり役に立たない。ただ都立高入試の共通問題は国語が非常に易しい。確実に得点を稼ぎたいのなら、話題の新書や古典を扱った随筆を習慣的に読んでおくことはおすすめしたい。(たとえば、白洲正子の著作は都立高入試にもよく出題され、参考になる。)北進ゼミナールの授業でも、普段あまり自分からは読まないようなジャンルの論説文を中心に解く機会を多く設けている。実はこれが一番確実な入試対策になるので、真剣に取り組んでいこう。